

第十三章 丸善本店の店舗と店員

一 丸善本店の位置と構造

明治九年の十一月の日本橋の大火に罹災した丸善は、直ちにバラック建てで営業を開始した。火災のために一時銀座の仕立店の二階に居を移した早矢仕有的の家族は、翌年の二月に日本橋通三丁目の奥座敷に戻っているから、居宅は比較的早く出来上ったのであろう。しかし長岡半太郎博士の「学生時代の丸善回顧」には左の通りある。

「予は明治十年ごろ、一つ橋護持院が原にあった英語学校と予備門で、少しく英文を学んだので、クエッケンボスの究理書を買いに、初めて丸善へ行った。しかし高価で持合せ不十分なため、ついにバーカーの究理問答を買った。その時ちょうど西南戦争が終った後一か月で、折も悪く、京橋より日本橋へかけて大火があつて、丸善も類焼し、バラック建で営業していたにもかかわらず、店の三方をふさぐ書棚には、ぎっちり洋書が詰っており、自分が買ったわずかに百頁ばかりの本が二円したことから推せば、少くも十萬円の代物が陳列されていた」

この文章には、やや不明の点があるが、長岡博士がバーカーの究理問答を購われたのが、西南戦争の終了後一か月であつたという記憶には謬りがあるまい。西南戦争の終了は明治十年九月である。そうだとすれば、丸善は、そ

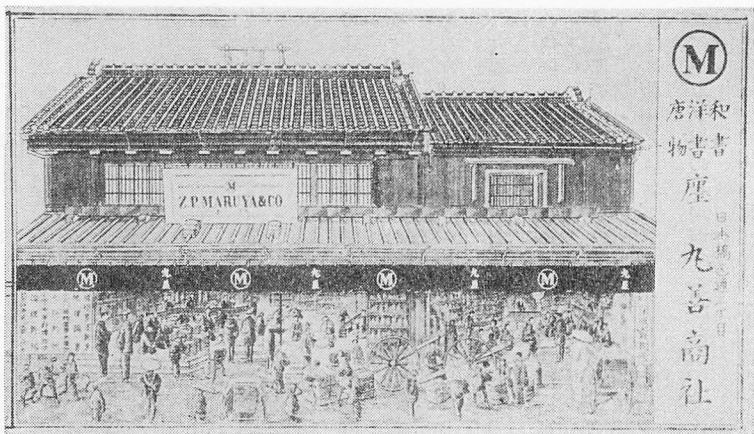
の年十月頃までは、まだバラックで営業していたのである。それが本建築となった年時が明らかでないのは、甚だ遺憾である。

なお長岡博士は前文に続いて

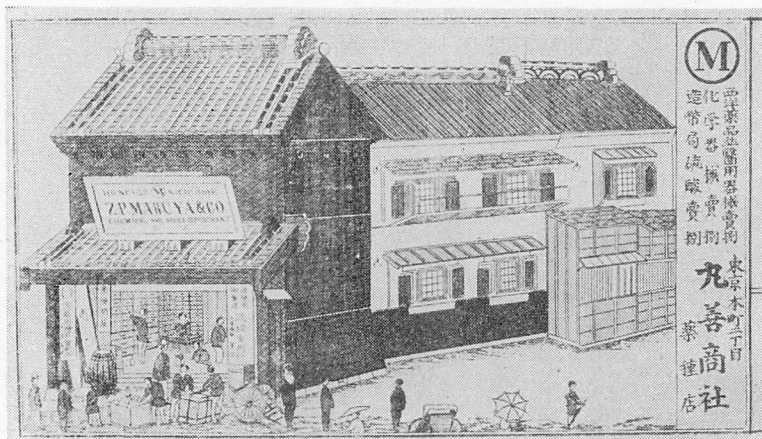
「その時分の円の価は貴かつたから、童心には痛撃を与えた。もし徂徠と同格の人がいたならば、モンブラン書店とでも命名したであらう」

と思ひ出を語っている。長岡博士は慶応元年の生れであるから、この時わずかに十三歳である。財囊の豊かでなかったことは、当然であらう。むかし荻生徂徠は、屋号の命名を依頼に來た小林新兵衛に、出入する書肆の中でお前の店の本が一番高いからといって、中国の五嶽の中で最も高い山の名を取って、嵩山房と名づけたという逸話がある。モンブランもアルプスの最高峯であるから、博士は丸善の洋書の高価なことを、これに倣って戯れられたのであらう。

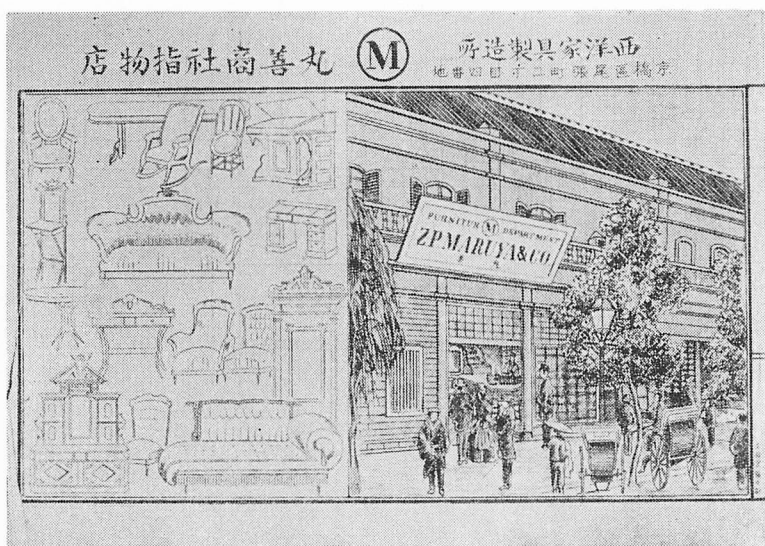
丸善の新築が成ったところ、日本橋通三丁目には、現在の桜通りの前身である数寄屋町と檜物町との間の細い横丁の角には、やや後になって時事新報社があり（明治十五年創立）、その北隣には鳥犀角円本舗があり、その隣に絵草紙屋の小林（鉄次郎）があった。そして唐物店の北には路次を隔てて鼈甲屋矢沢、金物店（失名）、後のエビス・ビール販売所（エビス・ビールは明治十七年発売）、川儀海苔店、近長飲食店があった。後に桜通りを広げたために、時事新報の一角が削られたが、大体ここからエビス・ビール販売所のところまでが、現在の丸善の表通りの間口であって、その北が御木本真珠店になっていた。



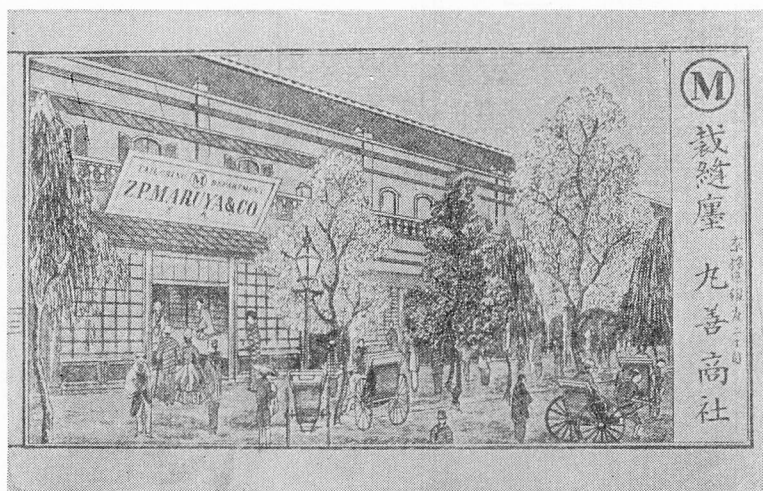
丸善商社



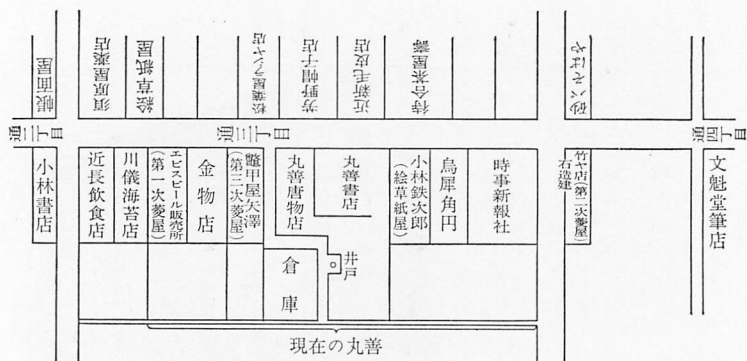
藥種店



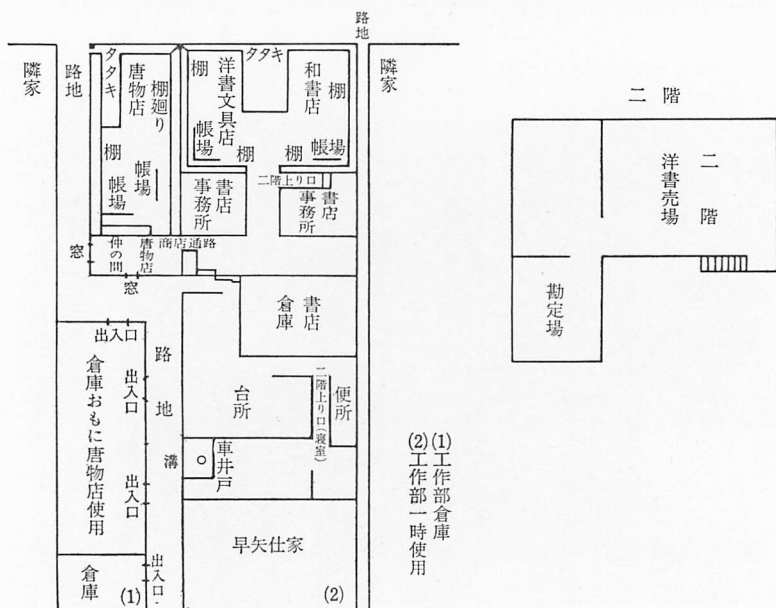
指物店



裁縫店



明治十年代の丸善付近の図



店内平面図

更に通りを隔てて丸善の向側には、近新毛皮店と芳野帽子店があった。近新の南側には、めずらしくも待合茶屋ことぶきがあり、芳野の北側には、松葉屋ラシャ店があった。そしてその並びの北端（近長の向側）には、須原屋書店と薬店があった。この一画は、いますべて高島屋百貨店に含まれている区域である。その概要は図に示す通りである。

丸善自身は、南側に書店があり、その北側に唐物店があった。書店は中央に土間が入り込み、その向って右に洋書・文具店、左に和書店があり、その後方にいずれも事務所があった。唐物店の北側には路地があって、鍵の手に裏側に通じ、その左手に書店の倉庫、台所、さらに早矢仕家の住居があった。その概要は同じく図に示す通りである。

明治十七年頃に発行された「東京商工博覧絵」というものがある。横綴の小本で、当時の東京の著名な店舗の状況を、図に描いて銅版に刻したものである。その第貳編下（明治十八年五月出版）の巻頭に、丸善商社の図がある。日本橋の書籍・唐物店、本町の薬種店、銀座の裁縫店、尾張町の指物店が四図に描かれている。いずれも当時の建物から、店頭の模様、さらに街路の光景まで示していて興味が深く、殊に指物店の図には、その一部に売品の洋風家具が例示してあるのが面白い。日本橋の書籍店の図の左端に、新刊書籍の広告が出ているが、その中に大島圭介の「堰堤築法新按」（明治十五年四月出版）があるところから、博覧絵の発行年代と考え合せて、この図がほぼ明治十六・七年頃の状態を示していることが推測される。

これと別に、明治二十一年十一月に刊行された「東京著名録」という書物がある。各官公庁・学校から、著名な

商工業者などを網羅した名簿である。(その発行者の一人に、丸善の支配人の小柳津要人のあることを注意したい)その末尾に、丸善商社の広告があるが、そこにも日本橋の書籍店の図が出ている。これは恐らくもと写真であったものを、彫版にしたものらしく、やや左前方から斜に写されている。「丸善社史」には、これを明治二十年頃のものとしているが、あるいはいくらかそれよりも遡るものかも知れない。いずれにしても前者と年代の極めて近いものである。前者よりはパースペクティヴの点で、遙かに真容を伝えているが、店内の有様が、前者の描写ほどはっきりしないのは遺憾である。

いまこの両図によって見ると、日本橋の書店と唐物店とは、連続した木造二階建の土蔵造りであるが、唐物店の方がやや棟が低くなっている。書店の二階屋根には、火見櫓があり、下屋^{げや}には Z. P. MARUYA & CO. の看板が上げられ、軒には丸屋と㊦とを交互に染め抜いた暖簾が掛けていた。この暖簾は後にはなくなった。大戸には潜り戸と臆病窓があった。朝の開店の時には、これを上げ、夜の閉店の時には、これを下すのであるが、かなり重量があって、小僧の力ではなかなか無理なので、後(明治三十年代)には喜七という男が、朝晩これを専門にしたという。喜七は丸善で地方への荷造り、発送などの力仕事に従事していた者である。両側には書棚があり、その奥手に帳場格子があって、勘定場になっていた。書店の向って右端の店頭には、陳列棚が置かれていたようであるが、これは後には取り払われたようである。

客は土間に立ち、または椅子や上り框^{かまち}に腰を掛けて、店員に書籍の名を云って注文すると、店員はこれに応じて、階下の書棚や二階の書庫から書籍を取り出したものである。冬は火鉢を、暖くなると大きい煙草盆を出して接待し

た。これは江戸時代以来の殆どすべての商店の伝統的な販売方法であって、越後屋や白木屋のような呉服店にしても、客は櫃に腰を掛けて好みの品物を注文し、居並ぶ店員（手代）は小僧に命じて、倉庫から反物を出させて、その注文に応じたのである。新しい営業を誇った丸善も、この点では他の商店と変らなかったのである。

二 丸善の二階

ただ長岡博士の追憶談には

「大学学生の制服が規定されたのは、そのころであった。制服に角帽をかぶって丸善へ行くと、土蔵造りの二階に昇り、書庫の本を引出して、縦覧する便宜を与えられ、始めて制服のありがたみを味い得た」

とある。帝大の制服が制定されたのは、明治十九年の四月であって、その実施は十一月であるから、博士の記憶は二十年前後のことであろう。

この図に階段は見えないが、これは不正確であって、土間の突当りに階段があって、そこから左へ二階に上ったのである。（ただしこれは客用のものであって、店員用のものは、なお奥の方に二つあったようである。）

これよりやや遅れて明治二十二年頃であるが、馬場孤蝶の追憶によると、

「階下でいろいろ本のことを尋ねるといふと、二階へあがってくれと云はれたので、階上へ行って、二種類の本を買って帰った。」

とある。

しかし生方敏郎の談話によると、

「二階は」 あったかも知れないが、まだお客様は上がれない。(中略) 二階のあることは知らなかった」

とある。これは明治三十年代のことである。二階へ上って倉庫の書物を縦覧することは、かなり後までも特定の人たちに限られた特権であったことがわかる。しかしまた当時新入の店員であった間宮不二雄(後の日本図書館協会顧問)の追憶談によると“*We have large assortment of books in upstairs*”と云う言葉を、紙片に書いて覚え込み、外国人が来店すると、この言葉でみな二階に上らせたという。この笑話もまた事実であろう。

なお田中二郎の追憶談によると、洋書を買うためにヨーロッパ人がよく来店したが、靴を脱ぐ習慣がないためにそのまま畳の上に土足で上ることが多かった。それで店員は、そのたびに

“*Please take off your shoes*” (どうも靴をお脱ぎ下さい)

と注意したものである。しかしこの場合、古参の英語の巧みな店員がいた時はよいが、新米で会話が碌にできない時は、手帳を開きながら

「ブリーズ、ティキ・オフ」

というが通じないために、構わず靴のまま上られ、

「ブリーズ、ブリーズ」

を連発しながら、後を追いかけたことも、珍らしくなかったそうである。

この二階は馬場などの記憶によると、五・六十坪はあったかと思われる畳敷きの部屋で、長さ二間に幅一間ほど

のテーブルが中央にあつて、その上に本が並べてあり、また三方は書棚になっていた。すでに書籍の種類によって分類はされていたが、その一部門は、畳半畳ほどであつた。土蔵造りのことであるから天井は低く、採光は悪く、すこぶる不便であつた。後に明治四十二年の第二回の火災後、丸善は赤煉瓦四階建の新建築になったが、その時には、一、二階ともに床から天井までの高さ十八尺という豪華なものとなり、その上に窓は大きく且多く、内部はまことに明るいものとなった。しかし、その半面ウォール・ケースを取りつけるスペースが少なく、売場としては必ずしも最善ということとはできなかった。田中二郎は「丸善の横顔」の中で、この新しい建物の長所と短所は、ものの不便な建物に永く生活した人たちの氣持を、忠実に反映したところから生じたといっている。首肯されるところである。

なお明治七年に、京橋以南にガス燈が点ぜられ、翌八年には京橋から万世橋まで延長された。火災後新築した丸善には、当然ガス燈が点ぜられたわけである。ところが天井が低いために、背の高いヨーロッパ人は、ガス管に頭を打ちつけて、小言を云うことが多かったという。またガスが点燈されている時に来た外人が、その下で書物を開いている中に、冠っていた臘虎か何かの帽子を焦がしてしまったこともあつた。また天井に引き込んだ鉛管に小さい損所が出来て、来客の外人から「ガスの洩れるのは危険だ」と注意されて驚いたこともあつた。さまざまのことがあつたものである。

序に電燈についていえば、電燈が点ぜられるようになったのは、かなり遅かつた。「中村重久日記」の明治三十年十月十一日の記事に、

「本社従来ランプ使用シタル工作部、台所等本日ヨリ電燈ヲ使用スルコトニセリ」

とある。即ち明治三十年から奥向では、電燈を使用するようになったのである。しかし店は相変わらずガス燈を使用したのであって、これが電燈に変わったのは、恐らく明治四十二年の火災以後のことと思われる。

三 店舗の模様替え

明治三十六年の暮ごろに丸善の本店は、かなりの模様替えを行なった。全体の店の構えそのものは、変らなかつたが、一階を和書部及び文房具部として、疊敷の部分をすべて取り払い、床にはリノリウム(?)を敷いて、客が書棚を立見し、また直接書籍を取り出せるようにした。

二階はこれより先に、かなりの模様替えが行なわれ、ストックを書棚に整理して、客に比較的自由に書物を縦覧させるようになったようである。間宮不二雄は明治三十六年五月の入社であるが、同氏の記憶によると、階段を上って右側(日本橋通り側)の南側には、理工系の書籍並に新着図書が陳列され、北側には外国雑誌が陳列された。階段の脇には、政治・経済・歴史・地理の棚があった。奥の方には、ドイツ書・フランス書があり、その隣に勘定場があった。ここには金沢井吉が、当時主任として在職したのである。

全体商店が、前近代的な坐売りの様式から、近代的な立売りの様式に変化するのには、店舗の構造なり、顧客の服装や生活習慣なり、更には交通や道路の事情にまで関係を持つものであって、商業史上注意すべき問題であるが、その年代を確定することは、案外むずかしい。東京では、三井呉服店(後の三越)が、明治二十八年に、二階を商

品の陳列場になっている。しかし階下はもとの坐売りであった。明治三十六年に、白木屋呉服店は、和洋折衷の三階建の建物に改築したが、これを機会に、すべての商品を陳列式販売に切り替えた。丸善の店舗の販売様式の変更も、これとほぼ時を同じうしているようである。ただこの坐売り方式から立ち売り方式への変更は、書籍部に先んじて、洋品部で行なわれたものようであるが、その切り替えがいつ行われたかということについて、(それほど隔たっていないということが想像されるが) 確実な資料が残っていないのは、すこぶる残念である。

四 店員の生活

ここでこの時代の店員の生活について、記述して置きたい。これは主として前記の田中二郎の追憶談による。田中二郎の入社は明治二十一年のことであるが、その以前もほぼ同じような状態であったと思われるので、これに従うこととする。

当時書籍部の店員は総数十八名で、内三名が洋書の係であった。唐物店、工作部、菱屋を加えても、その人数は全部で四十名ほどであった。店員の服装は勿論和服で、他の一般の商店と同様に、縞の木綿の着物に前掛を掛けていた。勿論すべて仕着せであった。(司現会長の入社した三十九年頃は給料で自辨した)。小僧が注文の本の仕入や、配達品を届けに出る場合には、襟に丸善商社を白く抜き、背に㊤の印をつけた絆天を着て、千草の股引に饅頭笠、草鞋穿きという姿であった。取扱う品物に似合わぬ旧式の服装であった。店員はすべてこの絆天姿で、黒塗りに赤字で㊤と書いてある箱車を曳いて、行きには客の注文を届け、帰りには出版元のところに廻って、書物を取って来

たものである。当時出版元は、大抵山の手にあったから、坂を下る時には、荷は重し、空腹ではあるし、神田川のような川端でも、たびたび川に落ち込むような危険を感じたそうである。

店員の間では、互に苗字は呼ばず、名を呼んだ。社長でも松下鉄三郎は鉄さん、支配人でも小柳津要人は要吉さんと呼ばれた。呼びにくい名は、呼び易い名に改めて呼んだ。総勘定場の伊村克巳は新一さん、洋書売場の金沢井吉は勿論万吉さん、あるいは万さんであった。金沢は後になっても、人から名を問われると、「手前は万吉です」と答えたという。ある意味で、これは商人としての矜持でもあったのであろう。しかし田中二郎の追憶談では、取引先の西洋人を紅葉館に招待した際、田中が接待役として気焰を上げていたが、小柳津支配人からジロ公と呼ばれて、それまでの酒の酔も醒めてしまったという。これも無理のない話である。

当時店員の大多数が、他の商店と同様に、住み込みであったことは、いうまでもない。従って特別の宿舎はなく、夜になれば店の畳敷の場所に、そのまま布団を敷いて寝所とするのが常であった。しかし営業の発展に伴って、店員の数は次第に増加し、寝泊りの場所は、ますます手狭になる。殊に今ほど清潔でなくて、畳には蚤などが多かったために、事務机の上に布団を敷いて寝る者もあるというような始末であった。已むを得ないこととはいいいながら、それは不規律でもあり、不衛生でもあった。

「中村重久日記」の明治三十一年六月十五日の条に

「社員寝所不定ハ取締上不都合ニ付、一定ノ場所ヲ定メ、適当ノ寝所ナキ分ハ本部ニ増設ヲ請求スルコト」とある。この頃になって、状況がますます窮屈になって来たことがわかる。明治三十六年に畳敷が取り払われて、

土間に改造されると、もはや従来の状態を継続することは不可能となった。そこで店舗の模様替えと、ほぼ時を同じうして、店員のための寄宿舎が建設されることとなった。

寄宿舎は丸善の裏手の数寄屋町に接した、もとの工作部の場所に新設された。二階建木造であって、階上に一号・二号・三号の三室、階下に四号・五号の二室があった。室の大きさは六畳位から十畳位までさまざまで、それによって入居者の数も、まちまちであったが、二号・四号などの広い室には、八人ほども同居した。後に（明治三十八年以後）店員のために夜学が開始されたが、それはいつも四号室で行われた。五号室は新入店員の居室であり、一号室は衛生室で、病人の保養のために用いられた。各室にはそれぞれ室長があって、明治三十七年に入社した福本初太郎の記憶によると、五号室の室長は、栗野彬であった。

食事はもとは台所で取ったが、寄宿舎ができてからは、その階下の食堂で取った。板敷に薄縁へうぎを敷いて、食事机を並べた。重役たちも、ここで店員たちと一緒に食事することが多かったという。食事は、朝食には八丁味噌の味噌汁を供したが、これは直接岡崎から送らせたものであって、小柳津要人が、岡崎出身であるために、その取り計らいによったものらしい。夕食の菜にも時折魚などもついたようであるが、勿論簡素なものではあったが、当時の程度の低かった一般商家の食事としては、かなりのものであった。これも丸善の店員優遇の方針を見るに足るものである。しかし主食は米飯で、それを自由に手盛にしたから、地方から上京した店員の中には、脚氣に罹るものもかなりあった。そのために一時麦飯に切り替えたこともあったらしいが、長くは続かなかったようである。

当時丸善の営業時間は、朝の八時から夜の十時までであった。店員の休日は、一年に四日で、元日、一月十六日

(簀入り)、七月十六日(盆)、十一月三日(天長節)であった。簀入りと盆は江戸時代以来の商家の仕来りである。明治九年の「丸善会話筆記」によると、簀入りと盆には、店員に金二朱を与えている。この頃それがどのようなものかは明らかでない。元日と天長節の祝日は閉店して、全部が休業した。

元日は早朝から、ほど近い茶舗の山本山で、賑やかな囃子が始まる。店員たちはこの音を床の内へ聞く。やがて横町の山田湯で朝湯を使い、それから雑煮を祝う。雑煮の餅は、暮にのし餅を二枚ずつ配給されているので、それを数片ずつ持って台所へ行くと、賄方では大鍋に汁を煮たてて椀に入れるというような有様で、実に和氣霽々たるものであった。

そのほか町内の祭とか、戦勝の祝などの時にも、早くから店を鎖して、内で店員一同に酒を振舞った。それを知らないで外人が入ってくると、頭に鉢巻をして酔払った番頭などが

「ハラデイ・ハラデイ(Holiday 休日)」

といって手を左右に振って断った。驚いた外人は、何か事件があるのだろうと、そこそこに帰るようなこともあった。

また正月など郵便の配達人が来ると、店で酒を飲んでいた者が、「まあ一杯」と杯を出す。配達人もはじめは辞退するが、「まあまあ」とさらに勧めると、少し飲んでいろいろ世間話をする。やがて帰る時には郵便御用と大きい赤字で書いた郵便物入れの黒革の鞆に、蜜柑を一杯詰めて持たせるといふようなこともあった。従って営業時間は今に比べて長かったにしても、全体の空気はのんびりしたものであった。客の少ない時には、店員が店で碁や将

棋をしている時もあった。そのために夜更しをすることもたびたびあったという。早矢仕有的が碁に耽っているのを諫めて、小柳津要人が碁盤を割ったという逸話があるが、それもあるいはこうした店員の習慣を矯正する意味があったものかも知れない。

毎月一回大体十五日の夜に、商話会と名付けた会合を開き、客の応待や店の経営について話し合い、業務の発展を図った。会が終わると酒が出たが、酒を振舞われるのは番頭だけで、小僧はお燗番であった。また毎月晦日は商店の慣習で蕎麦が出たが、これは伝票によって注文するのであったから、その時に食べなくても、後で利用することができた。近年まで丸善の筋向い（現在の第百十四銀行の場所）にあった「砂場」は、この当時からの出入りである。

明治十年代の丸屋書店の関係者の給料については、「丸善簿記心得」（八木佐吉所蔵）という珍しい資料がある。当時庶務会計係と思われる神山輯寧が、当時丸屋にあった多くの書類の中から、必要なものを抜萃謄記し、心覚えとしたものらしい。これによると、明治十五年一月に、本店勘定場に勤務していた社員は九人であるが、その中で社長早矢仕有的は月給三〇円、穂積寅九郎は二五円、金沢廉吉は二〇円、伊村新一は二〇円、大塚嘉蔵は一二円、大塚熊吉は八円である。また原書店（洋書売場）には十人が勤務していたが、その中で、小柳津要吉は二〇円、木村重三は七円（その外に帳面料一円）、金沢万吉は五円、寺田泰造は五円、清水太吉は二円五十銭である。また訳書店（和書売場）には、九人が勤務したが、その中で早矢仕民治は七円五十銭、小宮浅次郎は五円五十銭、野呂巽之助は四円、田沼千吉は三元（その外に帳面料五十銭）、石川卯吉は三元である。

ところが明治二十年代になると、田中二郎の記憶によると、社長（松下鉄三郎）は月給五十円、支配人は三十五

円、番頭は三十円くらいから三円くらいまで、人によってかなり格差があったが、十八円というのが最も多かったという。十年ばかりの間に、物価も騰貴したが、それに伴って給与もかなり増額されたのである。

なお田中によると、初任給は三円で、食費は一切店の負担であった。賞与は月給三円の場合は五円、六円の場合は八円、十二円の場合は十八円といった割合であって、一年一回暮に渡された。昇給率はその時の事情によって、下の方は二・三円、上の方は五円くらいであったという。

明治九年頃には帳面方にしても、売方にしても、小僧にしても、店員に手落ちがあった時には、天保銭一枚を出させ、その数によって過失の増減を計るという手きびしい制度があった。これはこの頃にはもはや廃止されたらしい。当時番頭は通勤ではなく、一週間に一度か二度自宅に帰るだけで、他の日は小僧と一緒に寝泊りしていた。これは交通の関係もあり、食費などの経済的の関係もあったのであろう。交通でいえば新橋から日本橋まで鉄道馬車が開通したのは、明治十七年六月であって、それが更に上野・浅草にまで延長されたのは、その年の十月である。一区二銭で、開通当時から非常な盛況であった。しかし馬糞はそのまま放置されたから、風の吹く日にはそれが乾いて、通りの商店の中に細かい糞となって飛び散った。また日本橋の橋詰に馬車の停留所が設けられたために、ここに馬が多く集まって小便をするので、晴れた日にはそれが丸善の店頭まで臭ったという。鉄道馬車のほかには、早く明治七年に開業した千里軒（由良清麿経営）の乗合馬車があった。鉄道馬車よりも一区について五厘安かった。落語家の三遊亭円太郎が、高座で喇叭を吹いてその運転の真似をし、それによって円太郎（エンダラ）馬車の名を得たことは有名である。

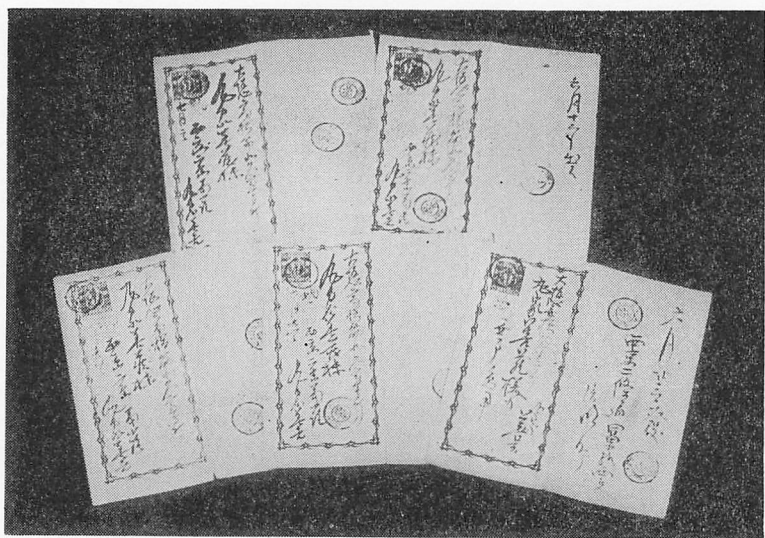
五 運輸と通信

河竹默阿弥の「勸善懲惡孝子誉」(明治十年上演)の中に

「御一新以来此の方の好い事を算^{かぞ}へますれば、先づ第一が御巡^{まわ}り様、続いて郵便針がね便^{だんり}(電信)、又鉄道に街^{まち}の瓦斯燈」

という台辞^{せうふ}がある。警察制度の整備はしばらく措いて、いかに一般の民衆が、文明開化の象徴ともいふべき交通機関と通信機関の発達を、便宜としたかがわかる。明治政府は、幕府時代の飛脚問屋の制度を改善して、明治四年から新しい郵便制度を実施し、東京・京都・大阪の三都、及び東海道の各駅に集配し、郵便切手もはじめて発売されたが、その発達は極めて急速であって、明治五年には、各地の県庁の所在地及び重要な都市には、すべて郵便取扱所が設けられるようになった。郵便ハガキがはじめて発行されたのは、明治六年のことである。これが商業の取引に非常な便宜を与えたことは、いうまでもない。現在明治七年頃に、京都の丸屋善吉から、大阪の丸屋善蔵宛に宛てたハガキが五通ばかり保存されている。多くは書籍を大阪支店から京都支店へ送ることを依頼したものである。ただ地方の顧客が、郵便で直接注文することは比較的少なかったらしい。これは荷物を発送する方法が、不便であったからである。そのために地方の顧客が、洋書を丸善に注文する時は、大抵地方の書店を経由したものである。直接注文が盛んになったのは、明治二十五年に、小包郵便の取扱が開始されてから以後のことである。

電話がわが国にはじめて輸入されたのは、明治十年(一八七七年)である。その前年にグラム・ベルが磁石式



丸屋善吉から丸屋善藏宛のはがき（秋田大三郎氏所蔵）

電話を発明し、この年ベル自身が、工部省の求めに応じて、宮内省で実演したのであるから、その輸入の迅速であったことに驚かされる。尤もその翌年から、電話は実用に供せられるようになったが、架設された場所は、すべて官庁ばかりであって、しかも機械もまだまだ不完全であったから、実際の効果は多くなかったようである。明治二十三年（一八九〇年）に、電話交換規則が公布されて、はじめて民間にも利用されるようになった。東京で最初の交換加入者の数は一九七（総番号数二六九、欠番七二）であった。一八七九年に、ロンドンで最初の電話交換を行なった時には、加入者は七、八人に過ぎなかったというから、それより十年後にしても、二百に近い加入者があったのは、むしろ成功というべきであったかも知れない。丸善はこの時に早速加入して、二八番の番号を獲得し、この年十二月の加入者人名簿では、三井物産会社（二七番）と、日本銀行（二九番）との間に、堂々とその名を列している。そしてこの年

九月発行の「和洋書籍及文房具時価月報」には、

電話交換

弊社ハ迅速ノ御用ヲ弁ゼンガ為メ、来ル十月ヨリ御実施相成ル電話交換ニ加入仕候間此段謹告候也

丸善商社

と予告している。

早矢仕民治の記憶によると、この最初の電話交換に加入したのは、日本橋地区では、丸善のほかには、川崎銀行（後に第百銀行に合併し、更に三菱銀行に合併した）、改新新聞社、喜谷市郎右衛門の四者に過ぎなかったという。喜谷市郎右衛門は、すなわち実母散の本舗である。白木屋に電話が架設されたのは、明治二十五年であって、丸善よりも二年後のことである。

電話交換に加入したことは、勿論丸善創業以来の進歩的な、ある意味では新らしいものの好きな店風の表われであったが、それはまた一方で、かなりの実利にもなった。田中二郎の追憶によると、当時としては注文がにわかに殖え、人手の不足を感じたとある。そして店では遠くから談話ができるというのが珍らしく、電話のベルが鳴ると、店員は「おれが出る、おれが出る」と、われ勝ちに受話器の取り合いをしたという。その頃の有様がわかる。

なお後のことになるが、明治三十九年に、郵便振替貯金の規則が公布され、三月から実施された。この時も丸善は直ちにこれに加入した。この年九月現在の郵便振替貯金口座加入者名簿には、第五番丸善株式会社、第七四番丸善株式会社大阪支社、第二七二五番丸善薬店（大阪）、第三五七四番丸善薬店（横浜）の四者が登録されている。

本店が五番という若い番号であることは、いかに丸善がいち早く加入を申し込んだかということを思わせる。伝えるところによると、実は丸善の加入申し込みは、最も早かったので、先着順によると、第一番となるべき筈であった。ところが逋信省内で、一商社会社に第一番の番号を与えるのはどうかという異論が起り、そのために、第二番を日本銀行に、第三番を第三銀行（富士銀行の前身の一つ）に、第四番を日本勧業銀行に振り当て、丸善は第五番となり、第一番はそのまま欠番となったという。（現在では第一番が日本銀行、第二番は貯金局である）

この便利で確実な送金方法が、実施されることとなって、地方からの直接注文は急激に増大したから、丸善がこれによって得た利益は、莫大なものであったに相違ない。

丸善本社の電話は、その後交換局の増設に伴なって、あるいは本局に、あるいは大手町局に変化し、その番号も久しく二八番であったが（他の番号も勿論増加した）、昭和二年以来二二一―二七番となり、戦争中特別の事情で最初の二番を譲与して、二二三番からはじまることとなったが、昭和三十九年以来、二七二―七二二番（代表）となった。このように電話番号は数次的変化を見たが、本社の振替番号は、いまなお当初のまま第五番を保持している。ただ明治四十一年に大阪に貯金支所が設置されて以来、東京を冠するようになっただけである。この番号は、六十年の長年月に亘って、多数の顧客によって利用された。そしてそれらの人々に取っては、丸善の名と、丸善から買い入れた書籍や洋品と共に、切り離すことのできなないつかしい記憶を残しているのである。